



井芹 精一さん

Iseri Seiichi

〔岩下二区〕

いせり・せいいち / 版画家。
第65回県美展（熊本県美術協会主催）版画の部において、甲佐岳と緑川の風景を描いた作品で、努力賞を受賞。

描くと彫るが一つになって 完成する工程が版画の魅力

「何げなく写真に写っていた風景を見て、これがふるさとである甲佐の風景そのものではないかと思つてテーマに選んだ」と作品を眺めるのは、第65回県美展・版画の部に出展し、努力賞を受賞した井芹精一さん。

東寒野から見える甲佐岳の稜線（りょうせん）と上揚の集落そして目の前に広がる緑川の流れを大胆な構図で描写し、墨の繊細な濃淡で作品に仕上げた。「80歳の手習いで始めて、初めて大きな作品を制作した」と

話す井芹さん。以前に、同じテーマで小さいサイズの作品として制作したものを、大きな作品として改めて構成し直して制作。「風景に遠近感を持たせて、緑川の緩やかな流れと激しい流れの違いを版画で表現してみよう」と試み、甲佐に暮らす人々にとつての原風景を彫り上げた。井芹さんは、「退職後、何か趣味として形に残ることを始めてみよう」と思い、知人の勧め

で版画と出会う。「最初は樫、次は里芋を彫ってみて、案外、自分の思ったような形が出来上がった。下手だろうと、世界に一つしかない自分の作品が出来上がったのを見て、続けてみようと思つた」と振り返る。

版画は、初めにデッサンして下絵をトレーシングペーパーに写し、裏返して版木に再度写して仕上げ、彫刻刀で丹念に彫つた後、墨を付けて紙に写すといういくつかの工程を経て作品が完成する。「作品が出来上がるまで時間がとてもかかるが、自分が彫つた作品を紙に写したとき、思つていたとおり彫れていたときの完成の喜びが版画の魅力」と井芹さん。「絵画などと違って、版画は一度彫つて完成すれば、自分の作品を何枚も刷ることで自分の手元にも作品が残るし、人にあげることもできる。作品が広く残ることも、版画の楽しさの一つ」と語る。「今は、写生的な風景をテーマに選ぶことが多い」と話す井芹さん。「甲佐神社を一度描いてみたいという気持ちはあるけど、自分のペースでできる分だけ」と朗らかに笑う。